

の『満州の土になる』ことはできなかった。

ようやく親孝行の真似ごとでもできそうになったいま、すでに父母はいない。

生死の幾山河

北海道 平木重男

昭和十五年茂兄が満州警察として渡り十八年北大農学部出身の貝沼洋二団長と知合い、退官後、東安県哈達河開拓団本部に勤務する。

当時札幌市定山溪石切山南の沢在住の農学部出、佐藤先生と貝沼団長の開拓要望を受け長兄は土地家屋を売却して家財農機具一式貨車輸送し私も鉄道を退職し父とともに家族七人で渡満する。哈達河開拓団には五月初旬に到着、団員の歓迎を受け翌日茂兄が用意した家に落ち着く。先に送金してあり農耕馬三頭購入済みで着任早々北海道農機具の全面的活動となり団員や満人達が見学にくるようになった。

私は翌年三月東安街で兵隊検査を受け牡丹江興隆歩兵部隊に入隊、七月初旬に突如移動命令で深夜列車に乗り込む。窓は幕でおおわれ監禁状態で三日間走りやっと停車したのが新京、行き先不明でまた南下して到着したところは安東省風城駅に各中隊は分散して葉煙草倉庫を仮兵舎に駐屯、南方八キロ地点の山で散兵壕を掘り、私は指揮班に配属、三分哨に分け谷間に糧秣、弾薬、被服を隠してその警備につく。夜中動哨のとき、月光ははえ真昼のごとく風の音と樹木の揺れが不気味であった。

八月十日以後のこと、本隊との伝令で歩いていたら時交際のあった支那人に、やがて敗戦となりお前達部隊は安東で武装解除されシベリアに連行されると話を聞く。

後日部隊は深夜十一時風城駅集結となり、その夜、義勇軍で渡満し妻子ある召集兵の斉藤吉右エ門(二等兵)と逃亡し、教えてくれた支那人宅に隠れていたが別人に密告され家族に迷惑をかけられず山中で軍服銃剣を焼去、貰い服に替え半月逃げ延びる。

九月上旬暴民に襲われまる裸になり山を下って風城難民收容所に入る。沼田尼会長に五龍開拓団へ秋の取り入

れ手伝いをいわれて行く。四日目、十人の兵隊と看護婦一人が避難してきた。翌日兵器持ち込み理由で暴動となり四人の兵隊が殺害され残りは逃亡した。

死体を野花で葬り団員家族とも即時トロッコに乗せられ退去、風城街は大変な状況にあり県長警察官等三人は公安局裏の川原で処刑された。

十二月初旬より寒さと飢えの中、ソ連軍の強制労働で田師付と本溪湖間鉄道の撤収をする。三月から八路軍の使役。六月風城脱出に失敗し留置所に入る。七月団員婦女子三十二人二回目の脱出、八路軍と中国軍激戦の中、奉天を目指した。子供一人背で死亡、一人は置き去り、暴挙に悩まされ八月中旬に着く。私は二十一年コロ島より帰国。

終戦時哈達河開拓団の長兄家族は八月十二日避難命令が出て本部に急送したが全員逃亡している。必死に追うが目沼集団には追いつけず別行動となり、あの麻山事件には巻き込まれずに済んだが途中父は流れ弾、姉はソ連軍包囲により自決。兄衰弱死亡、兄嫁子供二人は十一月無事帰国した。

新聞の尋ね人に四人殺害と逃亡した戦友の状況を掲載したが生死不明今だに家族も解らない。茂兄はシベリア抑留後二十三年帰国した。

暗黒の新京

北海道 平野 勇

私は網走と空知支庁管内で小学校の教員をしております。たまたま先に渡満していた旧制中学時代の先輩から、五属共和をモットーに王道築土の建設を目指す国策に沿って満州で活躍してみないかとのすすめもあったことから意を決し、昭和十四年四月九日渡満、二十七歳のときである。

満鉄の系列である国際運輸株式会社に入社（既に二月札幌での入社試験で採用済）新京視点金融倉庫係勤務となる。（同時に私立国際運輸新京青年学校教師をも兼務）内勤三年後、係所属の倉庫営業所、他一営業所長として現場業務に携る。昭和十八年のこの頃は、もう満、白